

編集後記

お手元の『企業家研究』第22号には、論説2本、特集論説、書評6本、FES便り、が掲載されています。

田付晃司論文は、「プロ野球球団の事業構造と経営実態」と題し、カープ球団（現在の広島東洋カープ）の創立期の苦境から、最終的に事業として成功するまでの歴史を明らかにしています。同球団は戦後、資金難の中から出発しますが、広島市や財界の有力者によって、新球場の設立や有利な球場使用契約などで助けられました。その事業では、球団が球場内の食堂・売店や広告看板の営業を担ったり、市の特別会計や基金に資金をプールして球団の改修に使ったりするなどの工夫がなされました。さらに1967年以後には松田恒次が経営を担うようになり、同氏が選手を育てるというコンセプトを確立しました。このように自治体との協力体制や球団と球場の一体化した経営が、同球団の事業の成功を導いたとされています。知られざる球団経営史が明らかにされ、たいへん興味深いものと思います。

沢井実論文は、大阪機械製作所を題材に、その経営者である山田多計治による軍事生産への多角化による同社の成長を説明しています。同社は創業後、1920年代の恐慌期を持ちこたえ、30年代には多数の機械企業を買収合併し、紡機メーカーとして急成長しました。さらに戦時期には紡績機械から軍事産業に転換して成長を続けました。そこには軍需一辺倒を慎重に避けるような山田の優れた多角化戦略がありました。しかし、同社の優れた技術者であった本田菊太郎はそうした転換を潔しとせず、青島の東亜重工業に移籍してしまいました。戦後、大阪機械製作所は民需の紡績機械の生産に戻りますが、その際には本田の不在が山田を苦しめることになったのです。ここには、同社の発展には、山田の戦略眼には敬意を表しつつも、実は本田の紡績機械への情熱や技術力が不可欠だったという著者のメッセージがあるように

感じられます。

今号の特集は、「スタートアップ創出のためのアントレプレナーの役割」であり、本庄裕司編集委員による趣旨説明では、経済を牽引する将来的な担い手としてのスタートアップに注目する論文が募集されたと説明されています。それに応えて、今回は、スタートアップにおいてAIの活用がいかにしてイノベーションの成果につながるかというテーマの論文が投稿されました。池田雄哉・羽田尚子論文は、AI利用がもたらす経営効果を明らかにしています。詳しい内容については本文に譲りますが、AIがスタートアップのイノベーションに明らかなプラスの影響を与えるという結論はもちろんのことながら、個人的には、AIのインパクトは新プロダクトの導入を目的とした場合に最大であり、既存プロダクトの改良を目的とした利用は市場成果に結びついていない、という結論に驚きを感じました。AIにはまだまだ不思議がいっぱいです。

書評に関しましては、6冊の重要な著書について、橋野知子先生、小関珠音先生、安部悦生先生、小林康一先生、原拓志先生、今井希先生による素晴らしいブックレビューが寄せられました。いずれも当該分野の第一人者の先生方による深い洞察にあふれたものばかりです。著書の魅力を紹介するとともに、その背景となる知識を説明し、著書の主張や意義をわかりやすく私たちに教えてくれます。ぜひご一読ください。

FES便りでは、2022年度の「企業家に聞く」の様子が記載されています。第1回は飯田豊彦氏（株式会社飯田代表取締役社長）、第2回は、奥山浩司氏（株式会社HCI代表取締役社長）のたいへん興味深い講話が紹介されています。ぜひご覧ください。

（島本実）